

書 評

服部一郎・細川忠義・和才嘉昭（著）

リハビリテーション技術全書〈全一冊〉

上 田 敏（東大病院リハビリテーション部）

敬愛する服部一郎先生が「図説脳卒中のリハビリテーション」を医学書院から出版された後、この3年位前から何か大きな計画にとり組んでおられるような様子が風の便りには伝わってきていたし、時々いただく例によってユーモラスなお便りにもそんな感じがほの見えてはいた。時には文献についてのおたずねがあることもあった。しかし、それがこのような大著として結実していようとは、うかつにも本ができて眼の前に置かれるまでは予想もしていなかったのである。

「リハビリテーション技術全書」とは、まるでシリーズ物の叢書にでもつけるような題名で、一冊の本としては一寸大げさではないかと感じられる人があるかもしれない。実は私も題名だけを聞いた時にはそのような感想をもたないでもなかった。しかし、実物を手にして、長大な目次を通覧し、ページを繰っていけばいくほど、「全くこうでもしか名のつけようはない」という思いがわいてきたのである。ここには服部先生の25年以上にわたるリハビリテーションの経験と思索のすべてが投入

されている。かつて日本のリハビリテーションに「服部時代」があつたし、また先生の教えを受けた「服部学派」が全国各地に今も広く存在していることは案外知られていないが、ここにはその蓄積のほぼ全貌があますことなく語られている。

著者の序文にも勝りをこめて述べられているように、先生のきずきあげたリハビリテーションは、外国から直輸入された、美しいが根のない切花ではなく、日本の土壌で丹精こめて育てられ、しっかりと日本の現実根を張つた大輪の花である。それはまた、大学病院や一部の大きな病院だけでおこなうことのできるリハビリテーションではなく、患者の立場に立つて良心的な診療を行おうとする臨床医とスタッフがいるならば患者のいるところどんなところでもおこなえるリハビリテーションでもある。先生の実学的な精神は常に徹底していて、私なども12年前にはじめてお会いした時以来接するたびに眼を洗われるような思いを新たにすのだが、この本も「技術全書」の名の通り、リハビリテーションの本質とあり方についての思索と内省に

裏付けられた、しかしまことに具体的、実的な技術が、手をとつて教えるように豊富な図によつて述べられている。

これこそ、中庸をえた、しかしいかにも服部先生らしい味わいのある個性に貫かれた、リハビリテーションの実的な指導書である。もちろんリハビリテーションの世界は広く深いので、これ一冊さえあれば後はいらぬということとはあり得ない。また個々の記述や意見については異論もあり得よう。しかし少なくともこの本に述べられていることを共通の財産として確認し、そこからあらためて出発することが、今日（健保点数の改訂を機に）第2のブームを迎えようとしているわが国のリハビリテーションの地についた発展のための前提条件であるように思われる。またそればかりでなく、この本を通して、わが国のリハビリテーションのすぐれた建設者のひとりである服部先生の人間性の一端にふれ「臨床的人間であること」の真髓を学ぶ人のひとりでも多いことを願うものである。

B 5 版/939頁/図648/¥22,000
〒300/医学書院刊